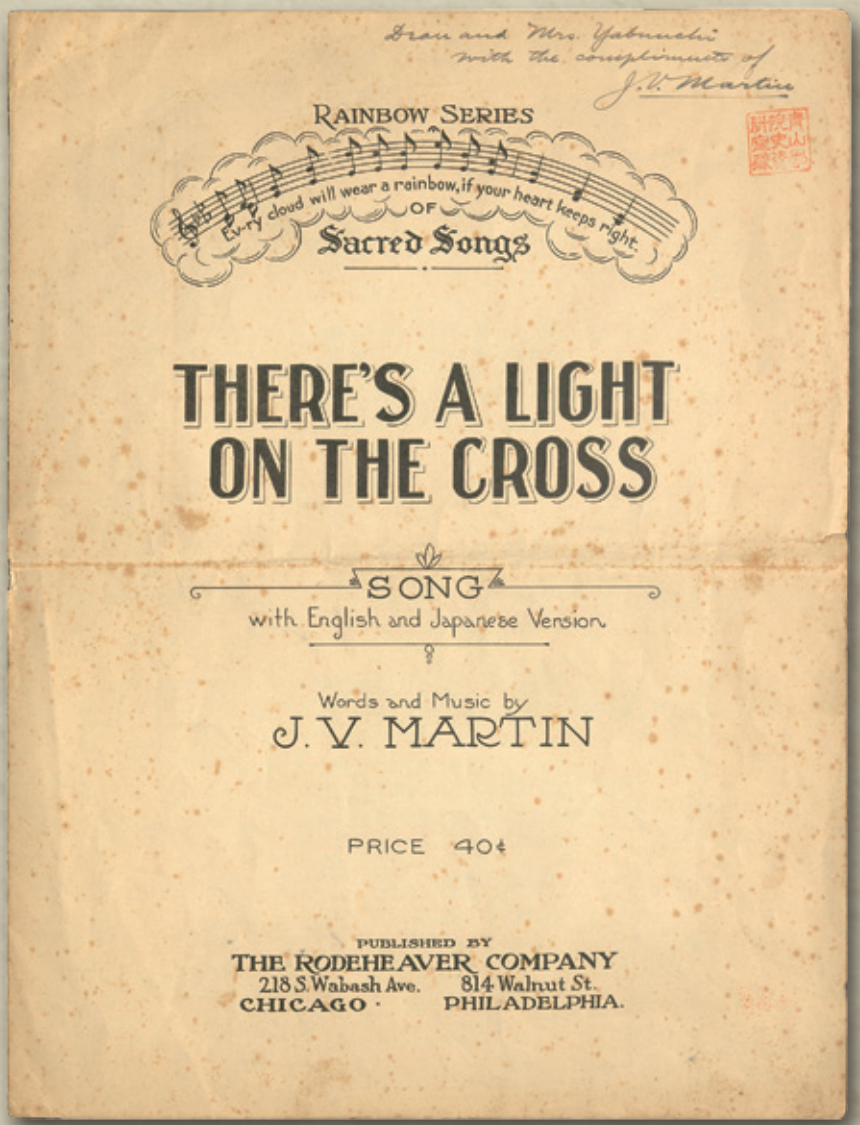
Aoyama Gakuin Archives Letter

青山学院資料センターだより 17 号



「There's a light on the Cross」楽譜の表紙（本文 p2〜3 参照）

青山学院資料センターで2点所蔵している楽譜のうち、薮内敬之助寄贈のもの。もう一点に比べて全体の焼け具合にはムラがあり、内側には日本語の別所梅之助訳の歌詞が後から貼りこまれている。出版物としては全く同じ二つの楽譜は、資料センターに寄贈されるまで過ごした場所や時間の違いを纏っている

資料センター所蔵資料紹介
聖歌「揺れ動く地に立ちて」の楽譜　鳥越　けい子―2

青山学院史探訪
もう一つの「南国土佐を後にして」　飯島　渉―4

資料センター利用状況・日誌抄 ―6

受入れ資料 ―7

利用案内 ―8

聖歌「揺れ動く地に立ちて」の楽譜

青山学院大学総合文化政策学部 教授　鳥越けい子

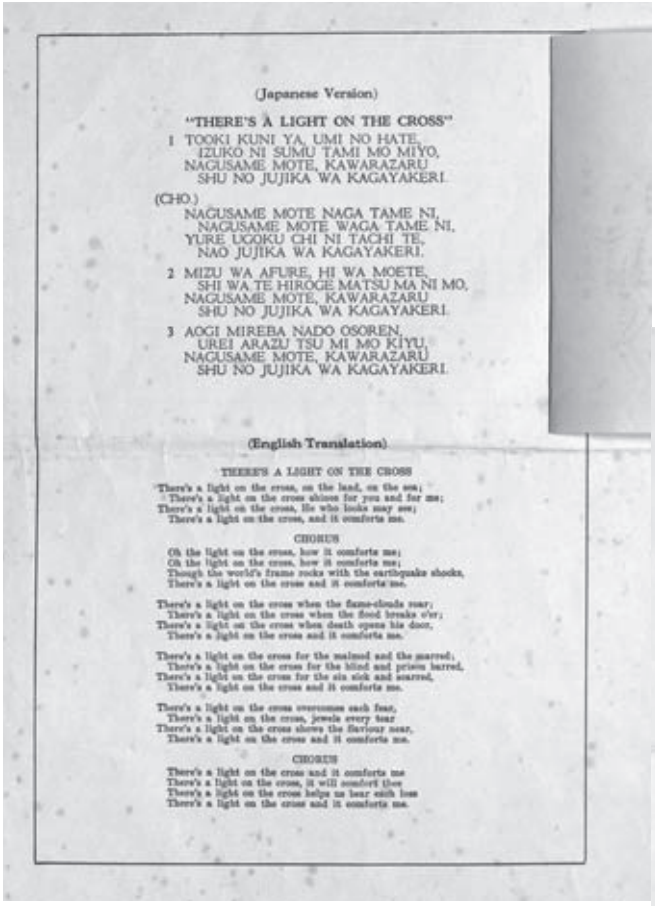
資料センターの所蔵品には、実にいろいろなものがある。今回紹介するのは楽譜だが、そこに記されているのは「聖歌の旋律と歌詞」に留まらない。この資料を通じて私たちは、関東大震災直後の青山キャンパスで何が起きていたかを、まるで映画のワンシーンを見るかのように知ることができるのである。

これは、日本語の歌詞の歌い出しから「遠き国や」（聖歌397番）として、その誕生の経緯からは「揺れ動く地に立ちて」という呼称で知られる聖歌の楽譜である。関東大震災（1923年）から間もないタイミングで、アメリカのロードヒーヴァー音楽出版社から出版されている。

James Victor Martin 宣教師

聖歌の「作詞作曲者」は、ジェイムズ V.マーティン（1875-1962年）。1900年に初来日し、長崎と熊本で４年間過ごした後、米国ダコタウェズリアン大学で10年間教壇に立ち、1914年に再来日。1930年まで青山学院に在籍した宣教師である。

この楽譜の入手ルートはふたつある。つまり、ひとつは聖歌が作られた当時学生だった井上龍友という人物が寄贈したもの。もうひとつは、当時高等学部長（1923-1932年）だった薮内敬之



(Japanese Version)

"THERE'S A LIGHT ON THE CROSS"

1 TOOKI KUNI YA, UMI NO HATE,
IZUKO NI SUMU TAMI MO MIYO,
NAGUSAME MOTE, KAWARAZARU
SHU NO JUJIKA WA KAGAYAKERI.

(CHO.)
NAGUSAME MOTE NAGA TAME NI,
NAGUSAME MOTE WAGA TAME NI,
YURE UGOKU CHI NI TACHI TE,
NAO JUJIKA WA KAGAYAKERI.

2 MIZU WA AFURE, HI WA MOETE,
SHI WA TE HIROGE MATSU MA NI MO,
NAGUSAME MOTE, KAWARAZARU
SHU NO JUJIKA WA KAGAYAKERI.

3 AOGI MIREBA NADO OSOREN,
UREI ARAZU TSU MI MO KIYU,
NAGUSAME MOTE, KAWARAZARU
SHU NO JUJIKA WA KAGAYAKERI.

(English Translation)

THERE'S A LIGHT ON THE CROSS

There's a light on the cross, on the land, on the sea;
There's a light on the cross shines for you and for me;
There's a light on the cross, He who looks may see;
There's a light on the cross, and it comforts me.

CHORUS

Oh the light on the cross, how it comforts me;
Oh the light on the cross, how it comforts me;
Though the world's frame rocks with the earthquake shocks,
There's a light on the cross and it comforts me.

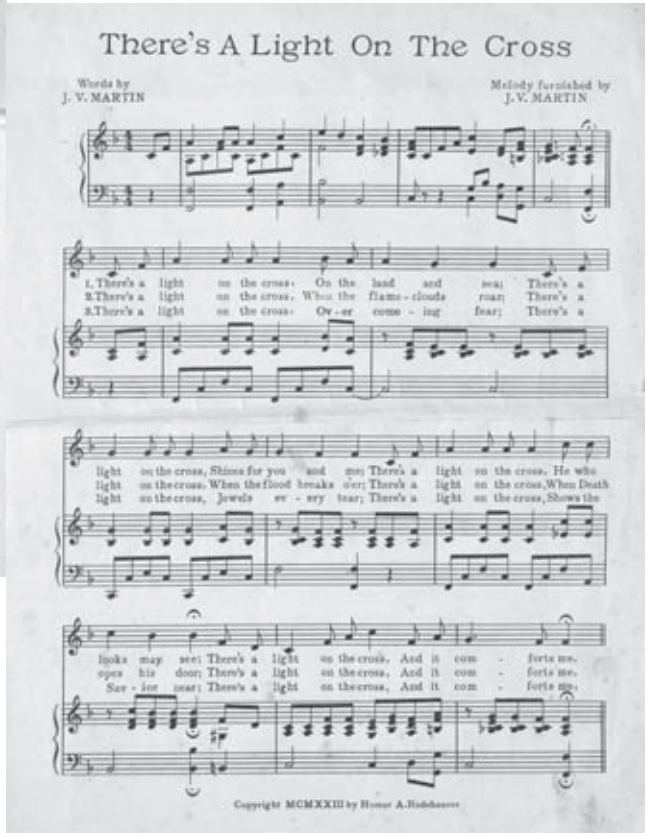
There's a light on the cross when the flame-clouds roar;
There's a light on the cross when the flood breaks o'er;
There's a light on the cross when death opens his door,
There's a light on the cross and it comforts me.

There's a light on the cross for the maimed and the marred;
There's a light on the cross for the blind and prison barred,
There's a light on the cross for the sin sick and scarred,
There's a light on the cross and it comforts me.

There's a light on the cross overcomes each fear,
There's a light on the cross, jewels every tear
There's a light on the cross shows the Saviour near,
There's a light on the cross and it comforts me.

CHORUS

There's a light on the cross and it comforts me
There's a light on the cross, it will comfort thee
There's a light on the cross helps us bear each loss
There's a light on the cross and it comforts me.



There's A Light On The Cross

Words by J. V. MARTIN

Melody furnished by J. V. MARTIN

1. There's a light on the cross, On the land and sea; There's a
2. There's a light on the cross, When the flame-clouds roar; There's a
3. There's a light on the cross, Ov-er come-ing fear; There's a

light on the cross, Shines for you and me; There's a light on the cross, He who
light on the cross, When the flood breaks o'er; There's a light on the cross, When Death
light on the cross, Jewels ev-ery tear; There's a light on the cross, Shows the

looks may see; There's a light on the cross, And it com-forts me.
opes his door; There's a light on the cross, And it com-forts me.
Sav-iour near; There's a light on the cross, And it com-forts me.

Copyright MCMXXIII by Homer A. Rodeheaver

上図：歌詞を掲載した今号表紙の裏面（楽譜2頁目）
右図：オルガン伴奏つきの五線譜（楽譜3頁目）
1920年代のアメリカで、聖歌の楽譜を知るうえでも興味深い資料である。美しく仕上げられたオルガンの前奏と伴奏を書いた編曲者名は明記されていないが、出版社の代表H.A.ロードヒーヴァー自身である可能性がある。

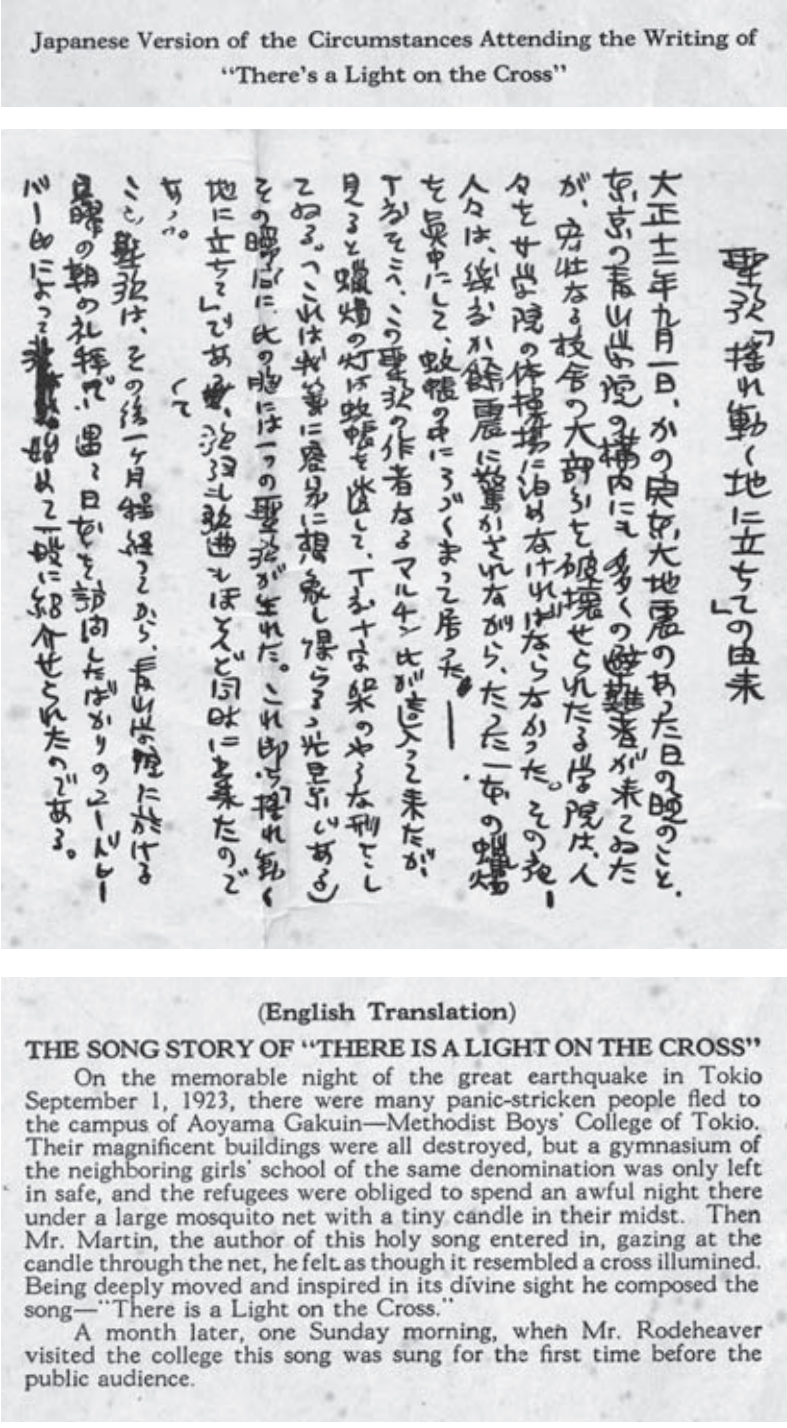
助が寄贈したものという、２つの楽譜が資料センターにある。表紙右上の書き込みから、それらがいずれもマーティン宣教師より、それぞれの所有者に直接贈られたものであることが分かる。

裏表紙（左頁「上図」）には、「遠き国や海の果て／何処に住む民も見よ／慰めもて変わらざる／主の十字架は輝けり／慰めもて汝がために／慰めもて我がために／揺れ動く地に立ちて／なお十字架は輝けり…」という日本語の歌詞が、大文字のアルファベットで記されている。同頁の下には、その「英語訳」として英語の歌詞が記されている。オルガン伴奏譜付きの五線譜は、次頁から始まる。

楽譜に続き、聖歌誕生の解説が先ずは日本語で、続いて「その英訳」が記されている（右図）。この日本語の解説を書いた人物は分からない。しかし、そこには聖歌が震災直後の青山キャンパスで誕生した経緯が、生き生きとした臨場感をもって綴られていて実に興味深い。

文章最後の部分は、この楽譜出版の経緯説明にもなっていて、五線譜下の「H. A. Rodeheaverが1923年この著作権を取得した」ことを示す小さな文字に繋がってくる。

阪神・淡路や東日本の大震災以降、この聖歌は被災地をはじめ、日本中でよく歌われるようになった。そこで語られるのは、マーティン宣教師が震災の日に大阪から東京の別な学校を訪れていたというエピソードだけで、青山学院の名前が登場することはない。この聖歌の出生地が青山キャンパスであることを伝える資料としても、この楽譜は大きな役割を担っている。



Japanese Version of the Circumstances Attending the Writing of "There's a Light on the Cross"

聖歌「揺れ動く地に立ちて」の由来

大正十三年九月一日、かの恐怖大地震のあった日の晩のこと、東京の青山学院の構内には、多くの避難者が来ておったが、壮麗なる校舎の大部分を破壊せられたる学院は、人々を収容するに足りなかった。その夜、人々は、絶えず餘震に驚かされながら、たった一本の蝋燭を最中にして、蚊帳の中にうづくまって居た。――

丁度そこへ、この聖歌の作者なるマルチン氏が這入って来たが、見ると蝋燭の灯は蚊帳を透して、十字架のやうな形をしておる。これは我等に容易に想像し得らるる光景である。

その瞬間に氏の胸には一つの聖歌が生れた。これ即ち「揺れ動く地に立ちて」である。汝羽毛編曲をほどこして同時に発表したのである。

こゝに聖歌は、その後一ヶ月経ってから、青山学院に於ける最初の朝の礼拝で、初めて部内に紹介せられたのである。

(English Translation)

THE SONG STORY OF "THERE IS A LIGHT ON THE CROSS"

On the memorable night of the great earthquake in Tokio September 1, 1923, there were many panic-stricken people fled to the campus of Aoyama Gakuin—Methodist Boys' College of Tokio. Their magnificent buildings were all destroyed, but a gymnasium of the neighboring girls' school of the same denomination was only left in safe, and the refugees were obliged to spend an awful night there under a large mosquito net with a tiny candle in their midst. Then Mr. Martin, the author of this holy song entered in, gazing at the candle through the net, he felt as though it resembled a cross illumined. Being deeply moved and inspired in its divine sight he composed the song—"There is a Light on the Cross."

A month later, one Sunday morning, when Mr. Rodeheaver visited the college this song was sung for the first time before the public audience.

上図：「揺れ動く地に立ちて」の由来（楽譜5頁目）
この由来は、もとは1枚の紙であるが、縦書きの日本語が横向きに置かれているため、読みやすいように切り離して配置し直した。日本語文章の独特な筆跡と、その内容からは関東大震災直後の青山キャンパスがどのような状況だったか、その中でマーティン宣教師がどのように「主の十字架の輝き」を見出したのかが、ある種の切迫感をもって伝わってくる。最後の部分からは、この楽譜の出版社名にもなっている人物、H.A.ロードヒーヴァー（1880-1955/アメリカのゴスペル音楽をはじめとする聖歌の作曲者・音楽監督）が関東大震災直後の青山キャンパスを訪れ、この聖歌の演奏にみずから関わっていただろうことも分かる。

もう一つの「南国土佐を後にして」

文学部史学科教授　飯島　渉

「南国土佐を後にして」の思い出

旧盆の時期でもある8月15日になると思い出すことがある。子どもの頃にはとても嫌だったのだが、父はいつも「懐かしの昭和の歌声」（おそらくそんな名前の）番組を見ていた。いくつかの哀しい曲が心に残っている。そのうちの一つは、田端義男の「帰り船」だった。歌詞の意味がよくわからずに聴いていたが、ホールにつめかける聴衆が涙を流していたのが印象的だった。ペギー葉山の「南国土佐を後にして」もそんな曲の一つである。

「南国土佐を後にして」が、実は戦時歌謡だったことを知ったのはごく最近のことである。有名な歌なのだが、念のため次によく知られている歌詞を書いておく。

南国土佐を後にして　都へ来てから幾歳（いくとせ）ぞ
思い出します故郷の友が　門出に歌ったよさこい節を
土佐の高知の播磨屋橋で　坊さんかんざし買うをみた

月の浜辺で焚火を囲み　しばしの娯楽の一時を
わたしも自慢の声張り上げて　歌うよ土佐のよさこい節を
みませ見せましょ浦戸をあけて　月の名所は桂浜

国の父さん室戸の沖で　鯨釣ったと言う便り
わたしも負けずに励んだ後で　唄うよ土佐のよさこい節を
言うたちいかんちゃ　おらんくの池にゃ　潮吹く魚が泳ぎよる
よさこいよさこい

日本音楽著作権協会(出)許諾第1713994-701号

「学生時代」や「ドレミの歌」で有名なペギー葉山が青学の女子高等部の出身であること、そして、自分はジャズ歌手だから、一世を風靡した「南国土佐を後にして」を歌うのは、はじめは嫌だったと語っていることを知ったのもつい最近のことである。

もう一つの「南国土佐を後にして」

まず、戦時歌謡について。この歌の原曲は、第二次大戦中に中国に出征した高知県出身者を中心に構成された陸軍歩兵第236連隊が歌っていたとされる。この部隊の通称は鯨部隊、これはもちろん高知県にちなんだ命名である。土佐民謡の「よさこい節」が歌いこまれているのもそのためである。戦後、復員兵らによって伝えられたこの望郷の曲は、曲折をへて、ペギー葉山による大ヒットになった。

『奇跡の歌』表紙

この歌にはいくつかのバージョンがあるが、「南国土佐を後にして　都へ来てから幾歳ぞ」は、「南国土佐を後にして、中支へ来てから幾年ぞ」というのがもともとの歌詞で、「月の浜辺でたき火を囲み　しばし娯楽のひとときを」も、「月の露営でたき火を囲み　しばし娯楽のひとときを」であったという。鯨部隊が中国大陸での戦闘の中で、望郷の念に駆られながら歌ったのが「南国土佐を後にして」だったのである。ちなみに、YouTubeなどで、戦時歌謡版を聴くことが出来る。

「南国土佐を後にして」を聴くと、哀しみが伝わってくる理由がわかって、また、今年の4月にペギー葉山が亡くなったこともあり、このエピソードをどこかで紹介したいと思っていた。ちょうどその時、門田隆将『奇跡の歌―戦争と望郷とペギー葉山』小学館、2017年7月が上梓された。門田氏は、ノンフィクション作家として、亡くなる直前のペギー葉山にもインタヴューしていて、私が知りたかった「南国土佐を後にして」をめぐるエピソードをあますことなく記録している。それは、鯨部隊の中国大陸での長きにわたる転戦の軌跡、ペギー葉山の前に幾人かの歌

手が「南国土佐を後にして」を歌いレコードも出ていたこと、ジャズ歌手としてのアイデンティティを意識していたペギー葉山はこの歌を歌うことに消極的だったこと、それを無理やり世に出したのが妻城良夫という音楽プロデューサーで、妻城自身も過酷な戦場経験を持っていたことなど。門田氏は、この本の中で、鯨部隊が飼育し、マスコットとなっていたハチというヒョウが上野動物園に贈られながらも、戦争の中で毒殺処分となったこと、その複製は流転をへて、高知市のこども科学博物館で展示されるようになったことなどを複線としながら、これまであまり知られてこなかった「南国土佐を後にして」をめぐる物語を掘り起こした。

ペギー葉山と「南国土佐を後にして」

門田隆将『奇跡の歌―戦争と望郷とペギー葉山』によると、ペギー葉山が1958年11月にNHK高知放送局のテレビ放送開始の記念番組として「歌の広場」に登場し、「南国土佐を後にして」を歌うと、会場は興奮のるつぼとなった。そして、翌年シングル発売されたこの曲は大ヒットし、「学生時代」や「ドレミの歌」と並んで、ペギー葉山の代名詞となった。2012年には、高知市のはりまや橋公園に歌碑が設置され、ペギー葉山も除幕式に出席したとのこと。この歌碑の建設に尽力したのは、当時、青学の高知県校友会支部長だった臼井浩爾氏であった。ちなみに、青学の中にも、ペギー葉山の歌碑がある。

「南国土佐を後にして」や「帰り船」が、勇壮な軍歌などよりもずっと、子どもの頃の私に印象的だったのは何故だろうか。それは、戦争体験をまったく持たない私にも会場をおおっていた聴衆の雰囲気をテレビから感じとることが出来たからかもしれない。

お盆が近くなると、父は私に「すいとん」を食べさせるのが常だった。私はけっこう好きだったのだが、そんなことまでしておきながら、「昔のすいとんは、こんなに旨くはなかった」というのが父の口癖だった。「すいとん」を通じて、戦争の記憶を伝えたいと考えたのかもしれない。父は1945年に小学校６年だったから、戦争の経験と言えば、航空機の燃料にするための松の根っこの油（松根油）を掘らされたことなどの話や食糧難の話が中心であった。私は、子ども心に、「そんなものを小学生に集めさせるようではとても戦争には勝てないのではないか」などという思いを抱いた。そして、いつもは温厚な父が、私が食事を残したり、食べ物を粗末にすると、声を荒げて叱ったことが思い出される。そんな父も今年の５月に亡くなった。1932年の生まれだから、ペギー葉山より一つ年上だが、ほとんど同世代ということになる。

戦争の記憶と記録をめぐって

私は、日常の暮らしの中で、歴史を扱うことを仕事としている。つまり、職業的歴史学者なのだが、そうした道を選んだ理由の中には、ここで紹介した8月15日前後の思い出もあるだろう。日々行っているのは、残された資料を読み、事実（に近いと思われる）ことがらの起承転結を考え、文章を書くことを通じて、過去の様々な出来事をまさに歴史にする仕事である。その方法を学生に伝えるのが私の仕事である。

しかし、振り返ってみると、「南国土佐を後にして」が歴史の中で持った、「歴史の綾」や「歴史の持つ豊かさ」というものを再現できているのか、を自問せざるを得ない。父が亡くなった時、私はもっと話を聴いておくべきだったと感じた。それは職業的歴史学者としての感覚と同時に、戦争を体験した世代が急速に少なくなる中で、歴史学が戦争をめぐる記憶をどのように記録するのかという問題に否応なく直面していることを感じたからである。

「南国土佐を後にして」をめぐる「歴史の綾」や「歴史の持つ豊かさ」を学生に伝えることはとても難しい。けれども、それを避けるわけにはいかない。今年の夏には、そんなことを感じたのであった。

青山学院本部棟そばにある「学生時代」の歌碑

2017年度前期利用状況

1. 月別利用者数（　）内は前年度の数

		4月		5月		6月		7月		8月		9月		計	
展示見学者数		317	(409)	271	(261)	479	(448)	210	(250)	591	(413)	251	(91)	2119	(1872)
資料閲覧者数		14	(12)	19	(15)	19	(22)	11	(32)	6	(16)	13	(12)	82	(109)
閲覧者の区分	本学学生	0	(1)	0	(3)	4	(3)	1	(17)	0	()	1	(1)	6	(25)
	現教職員	5	(3)	2	(3)	4	(5)	2	(6)	1	(7)	4	(2)	18	(26)
	旧教職員	5	(4)	12	(5)	6	(3)	6	(2)	2	(2)	5	(3)	36	(19)
	校友	0	()	1	(2)	2	()	1	(1)	1	(2)	2	()	7	(5)
	他大学教員	3	()	1	()	0	(1)	0	(2)	0	(2)	0	(1)	4	(6)
	牧師	0	()	1	()	0	()	0	()	0	()	0	()	1	()
	一般	1	(4)	2	(2)	3	(10)	1	(4)	2	(3)	1	(5)	10	(28)
利用の目的	教会史編集	0	()	0	()	0	()	0	()	0	()	0	()	0	()
	学校史編集	5	(2)	9	()	6	(1)	4	(2)	1	(3)	4	(3)	29	(11)
	著述・論文作成	2	(3)	5	(7)	4	(9)	2	(15)	3	(4)	0	(5)	16	(43)
	伝記資料調査	1	(1)	1	()	0	()	0	()	0	()	0	()	2	(1)
	記録類の調査・研究	4	(1)	3	(1)	4	(3)	2	(5)	0	(5)	0	(1)	13	(16)
	その他	5	(5)	2	(7)	5	(8)	3	(10)	2	(4)	9	(3)	26	(37)
資料の種類	青山学院史関係（AA）	12	(8)	16	(10)	15	(10)	9	(22)	5	(9)	9	(5)	66	(64)
	メソジスト教会関係（B）	2	(2)	3	(2)	0	(2)	0	(2)	0	(2)	1	(1)	6	(11)
	英語・英文学関係（旧F）	0	()	0	()	0	(1)	0	()	0	()	0	()	0	(1)
	明治期キリスト教関係（G）	0	()	0	(1)	2	(3)	0	()	0	(2)	2	(2)	4	(8)
	一般分類図書	0	(1)	0	(3)	2	()	2	(4)	1	(1)	1	(1)	6	(10)
	その他	0	(2)	0	(3)	0	(5)	0	(4)	0	(2)	0	(3)	0	(19)
資料の形態（閲覧点数）	図書	24	(18)	33	(23)	47	(39)	16	(117)	21	(125)	38	(15)	179	(337)
	マイクロフィルム	0	()	0	(2)	0	()	0	()	0	(2)	0	(2)	0	(6)
	写真(含ネガ)	0	(3)	3	(9)	0	(5)	0	()	0	(61)	2	(2)	5	(80)
	アルバム	0	(1)	0	()	0	(3)	0	()	0	()	2	(1)	2	(5)
	個人資料ファイル	0	(12)	10	(8)	3	(5)	2	()	1	(1)	0	(2)	16	(28)
	ビデオ・DVD等	4	(1)	0	()	0	()	0	()	0	()	1	()	5	(1)
	その他	2	()	0	()	2	(8)	1	()	0	()	1	(1)	6	(9)

※利用の目的・資料の種類は重複回答あり

2. 月別レファレンス件数（　）内は前年度の数

		4月		5月		6月		7月		8月		9月		計	
件数		8	(4)	9	(7)	5	(12)	10	(8)	4	(11)	5	(4)	41	(46)
質問者の区分	学生	0	()	0	(1)	0	()	0	()	1	()	0	()	1	(1)
	現教職員	4	(3)	4	(4)	3	(8)	8	(5)	2	(6)	3	(2)	24	(28)
	旧教職員	0	(1)	0	()	1	(1)	0	()	0	()	0	()	1	(2)
	校友	1	()	0	()	0	()	2	(1)	0	(1)	2	(1)	5	(3)
	一般	3	()	5	(2)	1	(3)	0	(2)	1	(4)	0	(1)	10	(12)
質問内容	文献所蔵調査	1	(2)	1	(3)	2	(3)	1	(2)	3	(3)	1	(1)	9	(14)
	写真所蔵調査	1	(1)	2	(3)	3	(6)	2	(2)	0	(2)	1	(3)	9	(17)
	事項調査	6	(1)	3	(1)	1	(3)	6	(3)	1	(5)	3	()	20	(13)
	その他	0	()	3	()	0	()	1	(1)	0	(1)	0	()	4	(2)

3. 日誌抄

2017年4月

・大学入学式のため展示ホール公開時間延長（1日・土）
・展示ホール、グループ見学4件
・資料センター職員、新人研修のため、構内案内
・他部署主催会議に出席　3回
・歴史資料館設置検討WG開催
・大学名誉教授来室、原稿作成のため
・150年史編纂資料収集のため学内調査
・150年史編纂資料収集のため学外出張
・150年史編纂のためのヒアリング
・150年史編纂事務定例打ち合わせ
・大学教授来室、150年史編纂のため　19回

5月

・展示ホール、グループ見学　4件
・学業・就職説明会（大学の保護者対象）のため展示ホール公開時間延長（27日・土）
・資料センター職員、大学の授業で資料センターの紹介、学院の歴史にかかわる人物について紹介
・他部署主催会議に出席　3回
・大学名誉教授来室、原稿作成のため　3回
・150年史編纂資料収集のため学外出張
・150年史編纂事務定例打ち合わせ
・大学教授来室、150年史編纂のため　11回

6月

・展示ホール、グループ見学　6件
・学業・就職説明会（大学の保護者対象）のため展示ホール公開時間延長（3日、10日・土）
・キャンパス見学会（大学1年生の保証人対象）のため展示

ホール公開時間延長（17日・土）
・他部署主催会議へ出席　3回
・大学名誉教授来室、原稿作成のため　1回
・ガラス展示ケース12台納品
・150年史編纂のためのヒアリング　2回
・150年史編纂本部・編纂委員合同会議開催
・大学教授来室、150年史編纂のため　16回

7月
・展示ホール、グループ見学　3件
・展示室5，6の幼稚園～大学までのパネル展示を、モノ資料展示に展示替え（24日開始）
・『Aoyama Gakuin Archives Letter』16号発行
・他部署主催会議に出席　2回
・150年史編纂のためのヒアリング
・150年史編纂事務定例打ち合わせ
・大学教授来室、150年史編纂のため　12回

8月
・展示ホール、グループ見学　1件
・大学、女子短期大学オープンキャンパスのため展示ホール公開（3日～5日）
・大学教授来室、150年史編纂のため　6回

9月
・史学科博物館実習の模擬展示展に、展示室4を貸出し（19日～30日）
・大学同窓祭のため展示ホール公開（23日・祝日）
・他部署主催会議に出席　2回
・青山学院防災訓練に参加
・大学名誉教授来室、原稿作成のため
・150年史編纂事務定例打ち合わせ
・大学教授来室、150年史編纂のため　7回

2017年度前期受入れ 資料

（学内部署からの資料は除く）

寄贈

（敬称略）

●株式会社アイビー・シー・エスより、
「ＩＶＹＣＳ通信」第125～130号　2017年4月～2017年9月

●雨宮 剛（校友・大学名誉教授）より、
『高麗博物館開館15周年記念誌「共生社会の実現を目指して」』高麗博物館開館15周年記念誌編集委員会編　2016年11月　ほかキリスト教関係図書4点

●大学文学部英米文学科同窓会より、
会報『Aoyama Sapience』第37号 2017年7月

●吉岡 勝見（青山学院大学グリーンハーモニー合唱団ＯＢ会）より、
グリーンハーモニーＯＢ ＮＥＷＳ　№55　2017年4月

●辻 雄史より、
『神戸市紀要「神戸の歴史」第26号』神戸市編　2017年3月　校友・勝田銀次郎関係資料

●小林 準より、
小宮山伍助（元教員）から小林準宛葉書2通（1979年7月8日消印、1978年切手印刷葉書）（集団疎開資料）

●井上 文子（校友）より、
岩本政毅（校友）から両親に宛てた書簡17通　昭和20年6月～10月（集団疎開資料）
岩本（井上）文子から両親に宛てた書簡18通　昭和20年6月～10月（集団疎開資料）
学校からのお便り綴り　昭和20～23年　ほか集団疎開資料多数

●西尾 豊（校友）より、
青山学院緑岡初等学校　学校愛國貯金袋（毎月8日、金壱円）

●村上 昇男より、
『伊豆国立公園天城温泉郷湯ヶ島温泉　落合楼アルバム』発行年不明（**写真①**）

●株式会社並木書房より、
『陽明丸と800人の子供たち　―日露米をつなぐ奇跡の救出作戦』北室南苑編著　2017年4月

●株式会社文芸春秋より、
『金谷カテッジイン物語　日光金谷ホテル誕生秘話』申橋弘之著　2017年4月

●笹森 建美（校友・元教員）より、
岡田哲蔵（元教員）氏講演「本多先生傳の文献」昭和7年12月　ほか資料1点

●木村 匠（校友・職員）より、
『高潮』第1号　大正8年12月
「青山学院創立90周年記念1874～1964」シール　大学郵趣研究部作成（**写真②**）ほか資料1点

●氣賀 知恵子（校友・元職員）より、
ミス・スプロールズ（元青山女学院院長）ほかが映っている写真　撮影年不明（**写真③**）

●吉田 恵子（校友）より、
アルバム『第57回青山学院中学部卒業記念』皇紀2600年（覆刻版）
『私たちと古事記』一紀会編・発行　2009年9月
第19回青山学院洋上小学校1993年6月テレフォンカード
ほか2点

●石津 珠子　より、
『カナダ・メソジスト婦人宣教師による日本における幼児教育事業に関する資料収集・調査研究　2002―2004』石津珠子、飯島千雍子、伊勢紀美子編著　2005年3月
ほかキリスト教関係図書5点

●下河邉 史郎（山岳部OB会）より、
「緑ヶ丘通信No.114」2017年4月　ほか資料1点

●阿部 志郎（校友）より、
写真：青盾会　1997・1999年　各1枚、18中学会　1994・1999年　各1枚

●小久保 基子（元職員）より、
『カレッヂ・ライフ1935』（青山学院高等学部商科卒業アルバム）、第52回同卒業證書授與式執行順序、同卒業祝賀会順序　1935年3月　ほか資料1点

●寺崎 裕則（元教員親族）より、
『よむカステラ』第23号　2017年

●髙山 弘三（校友の親族）より、
通告簿　青山学院女子専門部　髙山信子（**写真④**）
青山学院女子専門部家政科2年授業ノート（食品化学）ほか授業ノート7点

●庄司 一幸　より、
『関根要八の妻の先祖は赤穂浪士と佐佐木信綱の序歌と木村定三』庄司一幸著　2017年6月

●飯久保 知信（校友）より、
『岡部仁牧師を偲んで』日本基督教団大宮共立教会　1995年11月
●長井 明（校友）より、
『感じる　考える　行動する』青山学院初等部編　1982年
●李 徳周より、
『韓国教会130年　歴史を尋ねて未来に答える』2015年12月
●松岡 正樹より、
本多庸一書軸　詩篇51篇12―13
●齋藤 季夫（校友）より、
緑岡初等学校修了證書（齋藤美奈子）昭和19年３月
緑岡小学校修業證書（齋藤美奈子）第１～３学年　昭和14～16年　各１点
緑岡初等学校学習帳（日記帳）第４学年（齋藤季夫）昭和18年8月～昭和19年11月　ほか資料１点
●佐倉市教育委員会より、
津田仙生誕180年記念講演会資料「WHO IS SEN?　～近代日本の先駆者～」（佐倉・城下町400年記念事業　佐倉学リレー講座【特別編】）　2017年８月
●瀬尾 隆（校友）より、
緑岡幼稚園昭和16年撮影のＤＶＤほか写真データ１点
●吉田 一雄（校友）より、
『公孫樹』英米文学科４Ｅクラス会誌（卒業60周年記念）2017年10月
「島崎藤村と木下尚江」①～⑨　吉田一雄著　茅野市市民新聞抜き刷り2007年５月３日～５月13日
●河島 均（校友の親族）より、
高等商業学部卒業記念アルバム　昭和16年12月
中学部卒業記念写真帖　第49回　昭和７年３月
●佐藤 晟雄（校友）より、
『英米文学研究』第19・20合併最終号　2014年９月　ほか資料1点
●日本キリスト教団信夫教会より、
『戦争体験を伝えよう』2015年6月
●半田 より子（校友）より、
故笹森建美告別式次第及び挨拶状　2017年９月
●永野 英壬（校友）より、
女子短期大学　昭和29年卒業記念アルバム（私製）
●関田 寛雄（校友・大学名誉教授）より、
『青山学院大学SCAの歩み』2004年7月
●藤井 多恵子（校友）より、
緑岡初等学校第２回修了児童記念写真帳　昭和19年３月
女子高等部卒業記念アルバム　1950年３月

他大学・学校
年史・紀要類多数

写真①緑岡初等学校が疎開してお世話になったところ

写真②青山学院創立90周年記念シール

写真③青山女学院院長スプロールズと教員

写真④通告等（青山学院女子専門部）

青山学院資料センター利用案内

●展示ホールの見学
青山学院史関係資料の常設展示を無料にて一般公開しています。お近くにお越しの際には、ぜひお立寄りください。
公開時間　月～金曜日　▼9：30～17：00（入館は16：30まで）
土曜日　▼9：30～13：00（入館は12：30まで）
※2/26（月）～4/28（土）まで恒例の押絵雛を展示いたします。

●資料閲覧
青山学院史、明治期キリスト教関係資料などを公開しています。特定の研究目的を持って閲覧ご希望の方は、電話・ＦＡＸ・メールにてご連絡ください。
閲覧時間（いずれも昼休み11：30～12：30）
月～金曜日 ▼9：30～17：00　土曜日 ▼9：30～13：00

●休室日
日曜日・国民の祝日・年末・年始<12月25日（月）～2018年1月5日（金）>・その他青山学院が定める休日

●問い合わせ
TEL　03（3409）6742　　FAX　03（3409）8134
メールアドレス　ag-archives@aoyamagakuin.jp
青山学院ウェブサイトの中に資料センターのページがあります。こちらもご覧ください。
http://www.aoyamagakuin.jp/history/mcenter/

資料センター運営委員

院長（職務上）	梅津　順一	高中部（高）　教員１人	佐藤　隆一
常務理事１名（職務上）	楯　香津美	高中部（中）　教員１人	森田久美子
学院宗教部長（職務上）	大島　力	初等部　教員１人	窪田　靖
大学図書館長（職務上）	近藤　泰弘	幼稚園　教員１人	矢部　尚子
大学　教員１人	清水　信行	総局長（職務上）	石黒　隆文
女子短期大学　教員１人	清水　康幸	資料センター事務長（職務上）	傳農　和子

資料センタースタッフ人数

資料センター事務：
専任　3人
パートタイム　3人
（述べ週５日・2人）
『青山学院150年史』編纂事務：
有期職員　2人
パートタイム　1人
（週３日）

Aoyama Gakuin Archives Letter
青山学院資料センターだより　17号
青山学院資料センター編・発行
2017年12月20日発行
印刷：三美印刷㈱
1,500部